

『行人』は大正元年十二月六日、大正二年四月七日・九月十六日、十一月五日と中断はあったものの朝日新聞に連載された夏目漱石の作品である。その形式は、兄である一郎との関わりを中心に約一年間の自らの体験したことを弟・二郎が述懐するものとなっている。簡単に言えばこうなるのだが、終盤に入り、それまで語り手として兄を常に見つめていた二郎がその役割を自ら離れ、一郎の観察を彼の友人であるHさんに「二人で旅行をして、その様子を報告してもらった手紙を読む」という大きな転換が起こっている。しかもその報告を読んだ後に、二郎は感想など全く述べることなく、作品は幕を閉じてしまっている。作品内容自体が独特な世界なのだが、私はこの突然の変化こそがこの作品におけるもつとも特異なもので、最初にこの点に着目し、「行人」という作品の実態に迫るべき必要があるのではと考えた。まず私は物語の終わりを見据えた箇所を探してみた。

社会と相容れない状況に陥った一郎が、旅行中にHさんに「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしかない」と自ら語る場面は今後に希望を見出せないと判断していることが読みとれる。更に眠っている一郎を見つめて語る最後のHさんの締めくくりのセリフ「兄さんがこの眠から永久覚めなかつたら永久覚めなかつたらさぞ悲しいだろうという気も何処かですます（塵勞・五十二）からは一郎の今後を考える時、死を前提にしなければならぬ」ということが分かる。この悲劇性に唾然とし、二郎は何も述べられなかつたと解釈することは出来る。しかしこれまでとことん一郎と接してきた二郎が、この肝心なところで押し黙ってしまうことには、私は疑問を抱かずにはいられなかつた。そういう立場であつた二郎だからこそ、ショックで口が開けないような悲劇的なことがこの後に起こつたのではと想像するようになった。

このように考えると物語前半の二郎の述懐において、彼の一郎に対する多くの反省や後悔があることに気づかされる。それは一郎に「妻である直の節操を試すために和歌山へ行って泊まってくれ」ということを二郎が依頼されその報告をせまられた場面である。「兄に調戲うという程でもないが、多少彼を焦らす気味でいたのは確かであると自覚せざるを得ない」（兄・四十二）や「人格の出来ていなかった当時の自分」（兄・四十三）として振り返ったりと、厳格な姿勢で報告内容を守っていた一郎に対し、彼を甘く見るような態度をとつたことへの後悔の念がうかがえる。そして「姉さんの人格に就て、御疑いになるところはまるでありません」（四十三）という直に対する疑惑を晴らすためにあつさりと言にした一言に一郎が急に色を変えた時、直への同情もあつて「兄を軽蔑し始めた」、「多少彼に対する敵愾心さえ起つた」（四十四）という二郎は我がごとのように心配する態度をとっている反面、対立する感情を抱き始めたわけである。更に「善良な夫になつて御上げなさい。そうすれば嫂さんだつて善良な夫人でさあ」（帰つてから・三十三）と直を弁護するように一郎を戒めたり、「兄の故の通り親しい関係になるべく合わずに帰ることが多かつた」（帰つてから・三十七）りと矛盾した言動をみせるようになっていく。そのうえ一郎が学校の講義中におかしくなつたという話（帰つてから・三十）や、一郎が発熱時に謔言を発した（帰つてから・三十二）を聞いても、気にはするもの自ら向き合つて対応をしようとはしなかつたのである。今後の一郎に訪れると思われる暗い未来が現実となつた時、二郎がとつてきた数多くの行動はまさにすさまじい後悔となつて相当の苦悩を呼ぶであろうことは十分に考えられると言える。そしてここで最初に戻ると。兄との接触を全てHさんに委ねてしまつたことこそがもう語る資格がないという決定的な罪の意識を生んだため、二郎は手紙にさえ触れぬままであつたと私は考えるようになった。

だがここで二郎にこれだけ過去に対して後悔・反省をさせる暗い未来とは何なのか更に考えてみる必要があると言えよう。作中で挙げられている「死」も「発狂すること」も「宗教の道へ進む」ことも、全て決して歓迎されることとは言えない。しかしどれも一郎自身にとって必然性があるならば、それは必ずしも悲劇的とは言えないかも知れない。そして周りの人間にとつても全て徐々に受け入れることは不可能ではないし、「あの世」、「病院」、「宗教施設」などの離れた所で暮らすことになつたと解釈することも不可能ではないと言えよう。完結している作品であるため、その未来を「空白」と呼ぶのは憚られるであろうが、二郎に激しい罪の意識をも

たせた未来の悲劇を探る必要性を強く感じたため、私はその「空白」に目を向け、「行人」という意味深げな題をもったこの作品を大きく展開していき、何をもって「行人」なのかについても最後には答えが導き出せるように論じていきたいと思う。

### 一 孤独な二つの世界を見つめて

序論で述べた通り、一郎の未来は「空白」となっていて「死」、「発狂」、「宗教に入る」のどれに至ったかはわからない。ただ最後のHさんのセリフは読後も大きく響くし、作品中でも一郎の「眠り」に対して全体的に多くの場面で触れられており、「死」の予感がどうしてもつきまとってくると言える。しかし、一郎は実際は死なず、眠ったままで幕は下りてしまっているのである。私がこの終結を見て感じたのは、「夢十夜・第七夜」の世界と重なるものがあるのではないかという思いである。だがまずは二作品とその背景にある作者漱石との関係も決して外せないと感じるところがあり、そこから論じてみたいと思う。

「夢十夜・第七夜」に関してはイギリス留学時の漱石の置かれた状況や心情から推測して「明治三十三年、ドイツ汽船プロイセン号で英国留学に向かったときの体験がこの話の基礎にある」、「あるいは、パリで他の留学生と別れ、ひとりぼっちで夜の風浪のイギリス海峡を渡ったときの心中が反映しているかも知れない」(注一)という説がある。一方『行人』においても「おそらく漱石は、自分自身が辛くも乗り越えて来た「神経衰弱」、つまり狂気の経験を一郎に仮託して、その正体を懸命に見定めようとしたに違いない」(注二)と漱石と一郎のつながりが述べられたりしている。もちろんこれだけで一郎と『夢十夜・第七夜』における「自分」をイコールにしてしまうのは安易すぎると言える。しかし孤独という心理状態で着目すると『行人』執筆時の漱石は「文壇では孤立し、家族からさえ孤立し、気違い扱ひされていた」(三)という風が「孤独感」が漱石に一郎を書かせたということが見えてくる。よって両作品の深奥には同じものが流れていると十分みなせ、二人の人物は似たものを抱えた近い人物であると私は考える。

つづいて肝心の作品の世界について論じていきたい。両作品において、一郎も自分も明らかに精神的に不安定で何かに漂っているという感じが否めない。自分は航海中であるのだから、その不安定さは乗っている船の中で漂っていることで表現されているとはつきり言えるだろう。では一郎の場合は何に漂っているのか、船に相当するものは何かと考えた時、彼自身が「おれが盡く悟だ」(兄・二十)と語っているように、常に「何を考えているのか分からなくて自分の心を悩まし続けている存在だと感じさせる妻・直」ではないかと思いついた。何時何処の陸地に辿り着くか分からない船に乗り続ける自分と、妻でありながら彼女の心が分からず、その苦しみに常に翻弄されていると感じ、「夫婦の未来」が分からない状態に陥っている一郎には重なる点が多い。作品世界を大きく見てもよく似た状況に置かれている二人であるが、更に細かく見つめていくと、その時の彼らの心情さえも重なると思えてくるような、その他の登場人物の配置がなされている。『夢十夜・第七夜』の自分の「乗合は沢山居た」わけだが、「大抵は異人」で、「悲しい」という感情を抱いている。異人ばかりであっても「然し色々な顔をしていた」と書かれているわけだから、彼と気合う乗合がいないと断言できるわけではないのに、彼は自ら誰かに接近するといったようなことをしようとなど、「自分は孤独で悲しいことが当たり前なんだ」という風に船に揺られていると言える。一方の一郎は当時の「家制度」もあって「長野家の長男」として幼年期から非常に大切に育ててこられ現在でも家の中で、誰よりも敬われる位置にいて、一般的な視点から見ると、孤独の渦中にいる人間とはとても思えない。しかしHさんの手紙による報告から「兄さんの口から、彼がただ社会に立つてのみならず、家庭にあっても一様に孤独であると痛ましい告白」(三十七)として「兄さんの眼には御父さんも御母さんも偽の器なのです」(同)と明かされたことで一郎が感じていたものが発覚する。つまり一郎は、母が「長男という訳か、又気むずかしいという所為か、何処かに遠慮があるらしかった、一寸の事を注意するにしても、なるべく気に障らないように、始めから気を置いてかかった」(兄・七)という風に自分に接していたことなどを非常に鋭く感じ取っており、家族の愛は本心からのものでないと疑っていて、強烈に「孤独」というものを意識せずにはいられないことが分かる。更に「君は僕のお守になつて

「朋友としての僕は君から離れるだけだ」（塵勞・三十六）と断言して、「兄さんの口を遊る Ein samkeit」（孤独なるものよ、汝はわが住居なり）という独逸語を聞きました。（同）とHさんが書いているようにこの時もっとも近くに存在の親友・Hさんとさえ、心の距離がどんどん離れてしまっているわけである。つまり一郎の周りにも大勢の人がいるのだけれども、彼らは「異人」でしかないという意識をもっていて、「夢十夜・第七夜」の自分と同じ「孤独」を抱いていると言える。Hさんの報告ではその後、「一郎を孤独の窮地から救うため、人間を山にたとえたへモハメッドが山を呼ぼうとしたが、山が来てくれないので、自分から山の方へ歩いて行つた」という話をして、一郎自身が山へ歩いて行かないで異人と距離を近づける努力をしていないことが問題だと非難したこと」（塵勞・四十）が書かれている。しかし一郎は「もし向こうが此方へ来るべき義務があつたらどうだ」（同）と言って、「夢十夜・第七夜」の自分と同様に、孤独に苦しみながらも、自ら誰かに接近する必要を抱きたくても抱けない悲しい性質の持ち主であることが分かる。

そしてここまで考えて、「行人」と「夢十夜・第七夜」の世界が重なるのではと考えたそもそものきっかけである「死んでいない一郎と自分」の関係についてじっくり見つけていきたいと思う。海の中へ飛び込んだ自分が、確実に死へと向かっているのは本文の通りである。しかしその過程を彼の心情も克明に描きながら結局最後にははっきり死んでしまったことを書かずに、幕を下ろしたことに私は注目しているのである。先ほど述べた通り、私は船と直が対応しているのではないかと考えている。それを念頭に置いて「船と縁が切れたその刹那に」よせばよかったと思つた「只大変高く出来ていた船と見えてく水に着かない」の部分を読んでみると、一郎にとって直は非常に大きな存在であり、いざ死のうとしても、やはり彼女とは離れたくはなかつた、二人で幸せに生きていける平穏な陸地と言ふような場所に辿り付きたかつたという猛烈な思いになつてから襲われることになるのではなからうかと推測することが出来る。だがこう考えると一郎の自殺は考えられないものとなつて、海へと飛び込んだ自分とは決定的な違いが生じてしまう。ここで二人とも「死んでいない」という事実がポイントになると私は考える。一郎にとって何もかもを忘れられる死は憧れであるが、死ぬ瞬間に「自分は何処へ行くんだか乗っている方がよかつた」と悟つたのと同様に直とだけは離れるのではなかつたと後悔するため、自殺に限りなく近い行動をとるのが彼の未来にあり、それこそがまだ死んでいない自分と重なると言えるのではないだろうか。

## 二 暗黒の世界への旅立ち

それでは一郎が「未来」でどのような行動をとるかであるが、彼は「夢十夜・第七夜」の自分と同じように、Hさんがいない間にひっそりと、視力を失うために、自らの目を潰してしまうのではないかと私は考えた。あまりにも突飛な考えと思われるかも知れないが、健常者である一郎が自ら盲目になろうとする行動は明らかに自殺行為とみなせ、自分と重なると言える。とにかくこの仮説でも時折「夢十夜・第七夜」の世界と照らし合わせながら、『行人』で描かれているあらゆるものを見つめていくと、一郎がこの行動を選ぶ可能性は考えるに足るのではないかという思いが生じたので、それを一つずつ論じていきたい。

まずは一章ではあえて触れなかつた「死んでいく自分」の状況の一つに着目してみたい。彼が夜に飛び込んだ海であるが「水の色は黒かつた」と書かれている。もちろん彼が死の世界へと向かっていることを示すと考えるのがごく一般的な解釈と言えるだろうが、しつこく述べている通り、彼はまだ死んでいないのである。だから私は「黒い水」は光のない「暗黒の世界」であり、一郎はそこへ飛び込んだのだと考える。それでは肝心の何故一郎がこのような行動をとつたかであるが、それは直に対する愛を中心とした多くの感情がこの物語を通して生まれた結果の決意だと私は考えている。「Hさんとの旅に出す画策が動き出した時、一郎とその家族の物語ではなくなつていった」（注四）をはじめとして「塵勞」は一郎が社会のことなどに考えを広げて苦悩しているため、通俗的な見方はしてはならないといった論は多く存在している。しかし第一章で述べた通り私は「直＝船」と考え、一郎の心には常に直というものが大きく存在しており、ここで彼が口にする苦悩の根本のほとんどは直との関係からくる「夫婦の問題」と見ていいととらえている。たとえば一郎は前半部は学問ばかりしているという印象があり、そのせいもあつて直と

の関係がうまくいっていないのだから自業自得だと我々は考えてしまいそうになる。しかし「兄さんは書物を読んでも、安住する事が出来ないのだそうだ」（塵勞三十一）という報告のあと「兄さんは幸福になりたいと思つて、ただ幸福の研究ばかりしたのです」（同三十二）ということも書かれており、この時の彼にとつて、社会における問題と絡めていったために更に苦悩する状況に陥つただけであると考えられる。なお全く重なるように「夢十夜・第七夜」においても「一人の異人が来て、天文学など知る必要がない。黙っていた」という学問の必要がないという態度が示されている点も注目し値するものと言える。特に天文学と云えば、ここで挙げられている金牛宮の頂にある七星に限らず、何億とも存在する数えきれない星とその複雑な関係などを研究するわけであるから、一郎とイコールと考えられる自分が拒否反応を示すのは当然だと言えるからである。

話を戻すが、このように一郎は直との幸福な生活を夢見ているわけだが、（一郎は自らを「修養の出来てゐない気の毒な人間」とは言えても、自らの悪を口にすることはない）（注五）と論じられているように、最後の一郎のセリフは研究によつて直との生活を見つめ直し反省はしても「だからこそ直のために」という行動をとるようには思われない。つまり「直が自分に歩み寄ってくる義務がある」という考えを捨て去ることが出来ていないのである。こう考えると「失明したからこそ歩いてこい」という気持ちが一郎に目を潰すという行動をとらせたのではないかと思えてくる。また自分が船から離れた途端に捕まえるものを探す様子を見ると「失明してこそ直を頼りにする自分を許せる」というような気持ちが一郎の心の奥底にはあるように見え、それが「失明することによつて直が与えてくれる愛を求めよう」という気持ちを後押ししたのではないかと私は考える。

このように一郎の心理を分析してみれば、彼が直に対して「母が子に注ぐような愛」を求めていたのではないかと考えに至つた。直は一郎との間にできた娘に対して「始終芳江のおもりに気を取られ勝に見えた」（塵勞二十七）というように、芳江はまだ幼いのであるから、当然と言えば当然だが、親として真つ直ぐな愛を与えている。それに対して一郎は父親でありながら芳江に「怖い」と言われたりしているし、自らも、「己は子供を綾成す事が出来ない」（帰つてから五）と言つたりと娘の存在のために悩みが増えてしまつているといえる。この二つを前提に作品世界を見ていくと、一郎が直に愛を求めるのは芳江も大きく関係していることに気づかされることとなつた。

作品中で一番最初に子どもについて触れられているのは、一郎一家が登場する前である。二郎が親戚の岡田夫婦に子どもがなかなか出来ないの寂しいだろうと奥さんであるお兼さんに尋ねると「子供程親を意地見るものはないと思つておりますから（友達六）と返される場面があるのだが、ほんの冒頭部から子供を否定するような発言が飛び出しているという事は非常に意味ありげに感じられた。しかもこの作品の中に登場する子供は芳江ただ一人なのである。つまり芳江は最初から否定されるべき存在であつたとみなされるのである。そしてこれを一郎の視点に直してみると、「綾成せないことは自分に非があるのは分かつては分かつては見せびらかす的打ちをする風にも取れた」（帰つてから三）とあるようにお互いが愛し合つていながら一郎に強調していたため一郎は「芳江さえいなければ自分に対して、直が母のような愛を注いでくれるのでは」という芳江の存在を否定するような、まさに子どもといえる考えが無意識に生まれ、それが「直が愛すべきなのは自分だけでいい」という思いを知らず知らずのうちに育ててしまつたのではと考える。こういったひねくれた考えから「直を呼びよせよう」という心理が生まれたことを彼に行動をさせる動機の一つと私は付け加えたい。

ここまで私は自己中心的な考えで、自らの目を潰したように論じてきたが、それは一郎が従来から持っている性質のために起こつたため間違いなく動機の一部となっているだろうが、これが全てであるとは決して断言してはいけないと考えている。ここからは旅の間に明かされた「夫婦生活で起こつた出来事」と絡ませて論を進めていきたい。

一郎には考え方に変化が起こっていたと見て、その際に明かされた「夫婦生活で起こったため出来事」と絡ませて進めていきたい。

紅の谷で「Hさんは「自分と対象(蟹)がびたりと合えば、助言している」(注六)」と論じられているが、一郎は自分が所有したと思うものとは合致しているはずだという考えを抱いたのではないだろうか。実際完全には納得していないようで彼は曖昧な返事をしている。彼はこの時、所有したい対象の蟹は人間とはびたりと合わないと同時に、今このままでは自分より下の立場である直との幸福の共有はありえないと感じたのではないかと思える。そして直を所有し合致するためには自らが弱者になることに思い至り、Hさんの「自分を忘れるのさ」(塵勞四十八)という言葉が心に響き、無意識に受け身になること、お互いが愛を求め合うことも妥協したため、盲目になろうという思いを後押しする結果となったと考える。

ところでここでも「夢十夜・第七夜」の世界をのぞいてみたい。何度か私は「直||船」と論じてきたが、この物語には「一人の女」が登場している。そして「しきりに泣いていた」彼女を見て自分は「悲しいのは自分ばかりではないのだと気が附いた」のである。この箇所は一郎が蟹との調和から直と近づく必要性を無意識に感じとったことと重なり、更に自分たちが愛を求め合う似た者夫婦であることも無意識に気づいたとみなせるのではと考える。一郎は旅の前に「細君の頭にこの間手を加えた」(塵勞三十七)と告白し、「僕は何故彼女が僕に打たれた時、一言でも云い争ってくれなかったと思う」(同)と二人の距離感を嘆いている。しかしこの時の直の行動は一郎自身が語るように、彼を「無頼漢扱」しているわけではなく、心の中で涙を流しながら夫の心からの愛が注がれるのを待つという究極の姿勢で耐えていたのではないかと考える。だがこの態度が一郎の癪に障り、夫婦の距離はここで一気に離れてしまい、「悲しい」という直の気持ちも限界に達してしまったのだと考える。

そしてここで行き当たるのがやはり「夢十夜・第七夜の泣く女」であり、彼女はまるで「打たれた後の直の気持ちの化身」として現れているようである。自分に「一人だけが孤独ではない」と気づかせた彼女の役割は『行人』で蟹の存在を問題にして直と愛し合うことの重要性を気づかせたという経緯に比べると単純ではあるけれどよく似ているといえる。

しかし私がこう論じると、一郎と自分には決定的に違うことが指摘されるであろう。一郎は直と愛し合うために目を潰すという行動を起こすのに対し、自分は泣く女と近づくなどということは全くなく、ずっと孤独なままに船に乗りつけ、そして海へ飛び込んでしまうのである。この差異については一郎がどのような気持ちで直を愛し、そしてどのように彼女に愛されるつもりなのか考えた時に答えらしいものが見えてきた。

「一郎は母が子に注ぐような愛を求めていた」と先程私は論じたが、それが具体的にはどういうものかを考えることから始めてみた。「母の愛」を「聖母の愛」ととらえてみると、『行人』にも「夢十夜・第七夜」にも宗教や神や信仰といった類の言葉が非常に多く見られることに気づかされる。その点に注目してみると旅の中でHさんが神に対して「時々有難い気が起るなら、幸福になるか知れないじゃないか」(塵勞三十四)と語ると、それがあまりに安易な考えだと批判的に見たらしく一郎は「そんな意味のない口先だけの論理が、神を僕の前に連れて来てみせてくれるが好い」(同)と返している。更に加えると一郎は「宗教は考えるものじゃない信じるものだ」(兄・二十一)と語っており、神を目で見ようとしたり、考えようという意識的な行動が必要なものとして認めていないことが分かる。だがHさんとの問答は自分が幸福になる信仰の形を考えるきっかけになったようで、「僕は死んだ神より生きた人間の方が好きだ」(塵勞三十四)と語り、直を生きている人間として、聖母として崇拜する心理が無意識に芽生え始めたのではないかと考える。もちろんこの「宗教」は我々の知っている宗教ではなく、一郎の曲がった心理が生み出したものであることは言うまでもなく、失明して彼女の愛を感じようとするわけである。一方、異人に暗い夜空の中で輝く星が神の作ったものと聞かされた自分は「最後に自分に神を、空を見て黙っていた」とあり、空を見上げ、星が自分の信仰の対象とするものであるのだろうかを黙って考えていたのであるが、逆に「見た」「考えた」という時点で既に何かを進行することが出来ないかと悟ったため黙ってしまったのだらうと私は考える。このようなことから差異が生じたのであろうが、この差異があるからこそ、この二つの世界にはつながりがあることを更に私に感じさせた。

神の話に入り、少し現実離れをってしまったが、一郎がこのような観念的な考えから愛を求めるといふ以前に、一郎には現実面において夫婦としてお互いが心から愛を求め合わなければならないという危機に直面していたと私が考えていることも述べておかなければならない。「愛想を尽かしてしまったから」妻を妻と思っただけじゃないよ」と(塵芳二十五)という直の開き直りともとれるセリフに対して「心的になる交感をそれ程交わせないので、それでもこの世で認められた夫婦として様々に交わってきた一郎がどうとうお直と肉体的に交わることを一切止めてしまったという事実そのものに対する認識的かつ間接的な言葉」(注七)と論じられているが、私は一郎が口にしたという「纔に自己の所有として残っているこの肉体さえ、(この手や足さえ、)遠慮なく僕を裏切る位だから」(塵芳三十九)という苦悩に着目し、先程の説は観点が違うなど感じた。「肉体的な交わり」を止めるということ、一郎自身が語った「肉体さえ裏切る」では主体が異なっており、彼自身が止めたのではなく、出来なくなってしまった、つまり直に精神が揺さぶられ続けているという思いがそのまま不信につながって、直に対してセックスレスに陥ってしまったという夫としての苦悩を言いたかったのではと私は考える。精神面では裏切られていないので、せめて肉体面で愛を交わしたいという素直な気持ちを抱けるのだが、手も足も出ない状態であるという矛盾の苦しさがあらわれているのではと考える。ただこの作品は新聞連載のため、あえてこのような遠回しな表現にしたのであろうと推測することが出来る。しかしこうなることも心で愛を交わしていなかった二人が体で愛を交わすことも出来なくなってしまうことになり、「夫婦」として全く成立していない、ただ「長野家で一緒に暮らしているだけの男女」という、若い夫婦には非常に受け入れたい状況に陥ってしまったことは事実になってしまふ。こういう関係になってしまった二人の愛が渴き切る前に、一郎は直と心で愛し合わなければならぬという必要性をこれまで以上に感じていたと思われる。最初は先程述べた通り「直が自分に歩いてくるべきだ」、「こんな自分に対してでも、妻として愛するべき義務があるはずだ」という従来性の性質からくる気持ち捨てる事が出来ず、そうならないことへのいら立ちから彼女に暴力を加えてしまい、更に溝を深めることになったのだが、やがて失明すれば心で愛し合えるだろうという気持ちが生じたというわけである。

ここまで長々と一郎の側が望むであろう「未来」について論じてきたが、それでは直の側は夫婦関係をどうとらえてきて、それを受けた今後にはどのように生きていくつもりであったのかも考えていかなければならないと思う。一郎と直は愛されることを待つ似た者夫婦であるが、それが故に心で愛を交わせず、遂に一郎に暴力を振るわれるまでに発展してしまったことは先程述べた通りである。一郎はそれでも旅の間に何かしようと画策するわけであるが、直の方は打たれたことで、二人の関係において「妾の事なんかさかだから旅に出掛けたよ」(塵芳二十五)と心で愛を交わされることは不可能と断定したようである。先程引用したように一郎が旅に出たから芳江の相手ばかりしているのではある。つまり彼女は「夫婦の未来」を諦めてしまったとみなせるわけである。そんな中で失明した一郎と再会したら彼女はどうかになってしまうのだろうか。当然最初は戸惑う、呆れる、自分への当て付けではないかと疑いを抱く、自分自身を責めるなど色々な感情が生まれることが予想される。だがとにかく彼女は「長野家の長男の嫁」であり、「芳江の母」という立場である以上「家制度」の束縛もあって離婚することは出来ないであろうから自然の流れとして一郎の世話をすることになると言える。そうすると一郎の望みは叶い、目は見えないが心を開くことになり、それに対応するようになり、直も彼を世話することに「生きる意味」を見出すことになり、次第にお互いを神と見なせる程の心からの愛を交わせることになるのではないかと私は考えた。更に多少強引かもしれないが一郎が旅の中で触れ合った植物に花言葉という観点で目を向けてみると、この未来を裏付けるようなものが見えてくる。薄(すすき)の「隠退」は健常者としての立場を退くという意味で「失明」があらわされるが、月見草の「無言の恋」は「視力がなくても通じ合う愛」とみなせると言える。そして「かな」には「堅実な未来」という花言葉があり、夫婦は一郎の失明があったからこそ、真実の愛を獲得し、確かな未来を歩んでいくのではないかと私は考えるわけである。更に「堅実な未来」を手にしたということは、新たな子供の誕生が予想されるくらい信頼関係が確立されたともいえる。つまり「肉体的なる交情」も回復したと考えられる。そのうえ愛が深まった分、それは更に幸せを呼ぶことになっただろうということも付け加えておきたい。

最後に一郎が失明するという「未来」に関しては「夢十夜・第七夜」の世界からだけでなく、『行人』にも盲目の女性の「女景清」という逸話で触れられていて、こ

れも私の論の大きなポイントになっていることを述べておきたい。この逸話が父によって話された時期はおそらく一郎夫婦が心が通じ合わなくて決定的な危機に近づいた頃と思われる。そんな中で彼らが父からその盲目の女性が男に捨てられた悲しみを込めて「両方の眼が満足に開いている癩に他の了見方が解らないのが一番苦しゅう御座います」（帰ってから・十八）と語ったことを聞かされたことは大きな意味があったとしか私には考えられない。実際一郎はこの時「神経的に緊張した眼の色」（同）を見せ、おそらく初めて失明することと愛について漠然とながら結びつけたのだろうと私は考える。更に一郎は「男は情慾を満たせるまでは女の方はく男を羨慕う様になる（略）それでその男もく結果結婚を断ったんじゃないでしょうか」（帰ってから・十九）と語り、直も心で愛を交わし合うことを望んでいるだろうかと考えてみたのだろう。また自らの「自分はどうかあってもくスピリットを攫まなければ満足が出来ない」（兄・二十）という考えは正しいという確信を持ち、そうでなければ真の夫婦にはなれないと考え始めたのではないだろうか。そもそも第一章にあたる「友達」から、既に二郎の友達である三沢が語った「僕は病気で構わないから、その娘さんに思われたいのだ」「気に入るようになったのさ、病気が悪くなる程（友達・三十三）というセリフが、男も女も恋愛においては精神面を重視するべきことを強調しており、相手がどんな女であっても男が心から愛そうとすれば真の愛になるということを示唆していると言える。一郎は元来の性質からそれが分かっているも実行できず直が心の交わりを求める女だと確信を持てずにいたわけだが、盲目の女性が語った言葉とそれを受けて自らが語った「女性の恋愛観」が胸に響きつづけ、最終的には直も心を欲しがらる女であるだろうということに賭ける思いが、一郎に目を潰すという行為を最終決断させたのだと考える。

結果、私是一郎が賭けに勝ち、直との幸福な夫婦関係を手に入れた、悲劇が転じて喜劇になったという風に論じてきたわけである。しかし当然ながら二郎は一郎の失明を悲劇ととらえ、述懐において多くの後悔・反省を口にしたのだろう。更にこのような不自然な形で手に入れた幸福など本人たちがどうとらえようと幸福ではなく悲劇と受け止められる方がよっぽど世の中の理にかなっており、二郎もそのような思いが強かったと考えられる。それどころか私は二郎が未来で一郎夫婦が悲劇の末、幸福を手に入れたことを見つめたことこそが最後に押し黙ってしまった最大の原因だったと述べたい。これは二郎の述懐を良く検証した結果、二郎はまだ多くの後悔をしていると思われる場面があり、それにはある統一性がみられるからである。第三章では、その二郎の後悔を明らかにし、『行人』における本当の「未来の悲劇」について論じていきたい。

### 三 幸福な暗闇の裏側

ここまでは二郎の一郎に対する反省・後悔から視点はほとんど二郎に据え、その悲劇を論じていき、とうとう「夫婦の悲劇」にまで発展させてきた。しかし「夫婦に悲劇が起こった」ということは、当然妻・直にも一郎の悲劇に対する二郎の反省や後悔に相当、もしくはそれ以上のものが背景にあったのではと考えるようになった。これまでの論ではあえて避けてきたが、そもそも二郎が真剣に夫婦を見つめるきっかけになったのは「直は御前に惚れてるんじゃないか」（兄・十八）という一郎が二郎に語った疑惑からである。私是一郎がその疑惑をどんどん膨らませていく中で、理想の夫婦に近づけないという苦悩の泥沼にはまってしまったのだろうと少し先回りして論じてきた。だがこの疑惑を打ち明けられた後の二郎の目に映る直を見ると、その疑惑の真偽が定かではないという思いを私も抱くようになって。そしてこれこそが第一章で述べた「直に漂い翻弄されつづけていた一郎」の本当の意味である。何故このように表現したかを直という女に視点を当て、彼女がこの物語の間のようなことを考えていたか、何故このような行動をとったのかということ、そしてそれを見つめ、時には向き合ってきた二郎についても、ここでも「夢十夜・第七夜」と照らし合わせながら、じっくり論じていきたい。

まず断っておきたいのだが、直が二郎に義弟以上の思いを抱いていたかどうかについて疑ったからといって、「夫婦はお互いに心から愛し合うことを求めていた」という前章までに述べたことがいい加減ではなく、その根拠も示してきたとおりである。ただ直の方がその気持ちが少し薄いように感じられるのも否定できない。こ

れは一郎の気持ちが作中で多く読者に伝わってくるのも一つの要因であるが、何よりも挙げなければならないのは、直の二郎に対する言動である。二郎が一郎に疑惑を打ち明けられるまで普段の二人は楽しげに話したりはしていたが、それはあくまで仲の良い「長野家の嫂と弟」というレベルである。だが暴風雨のなか和歌山で二郎と一泊したときの直は明らかに一人の「女」となっていると見える。たとえ停電の最中だからといって、義弟がすぐそばに居るのに着換えをするというのは、明治から大正にかけてのこの時代の普通の女性としては考えられない行動である。しかも夫がいなくても慎みにしないといけないというのが妻としての常識と思われるのに、だからこそ大胆な行動をし、「女」としての二郎への思いをあらわにしているところとらえられるのである。更に二人は床に着くのだが二郎は暴風雨の恐怖に考えを巡らしているの対し、直はそこから「死」について真剣に語り「これから二人で一所に飛び込んで御目に懸けましょうか」（兄三十七）という心中発言するのである。夫である一郎でなく、義弟である二郎に「あなたと共に死ぬ」ことを持ちかけるというのは、愛を求めている確実な証拠であり着換えの件も含めて直は二郎を誘惑しているといえる。

ここで考えられるのは「直は意識的・自覚的には心的なる交感・交情も肉体的なる交感・交情と共に一郎に求めてきたのであろうがそれがうまくいかない反動で、自然に無意識に二郎に心的なる交感・交情を求めたようになった」（八）ということである。そうであるならば「長野家」から解放された特別な空間に入ったという大きな反動により二郎の前で「女」を見せてしまったのではないかという考えに至った。つまり直にとって二郎は何気ない会話で親しみを感じられる相手だったのに次第に特別な存在としてみなすようになり、いつかもつと近づきたいという思いを無意識に持ち続けていたのではと考える。ここで「夢十夜」に着目してみると「船」は太陽に追い越され、先へ行ってしまわれ夜になってしまい追いつけずにいる。だがそれでも船はどんな星よりもキラキラと輝く太陽を追いつけており、それは直が心の最後の抛り所である二郎と肉体関係を結ぶ機会を追いつけているかのようである。また「夢十夜」では音楽に夢中になっている男女が登場しているが、これは一郎が抱きつづけた「二郎と直が心的なる交感・交情をしているか」（九）という寂しさからきた疑いのせいであらわれた、二人の化身とみなせるのではと私は考えている。そしてそれが具体的にあらわれてしまったのが、奇しくも一郎自身が二人で行かせた和歌山での出来事だったと考える。二郎はこの夜のことを「自分は彼女と話している間始終彼女から翻弄されつつある様な心持がした。（略）自分に取て不愉快であるべき筈なのに却って愉快でならなかった」（兄二十八）と語っている。つまり直に愛を求めていることを無意識に感じ、それは快感をもたらした「心的なる交感・交情」を完璧に結んだうちは肉体的な交わりにも心は動いたとみなせる。しかし直がこの時二郎を翻弄できたのは特別な空間であったためで、これ以上一郎の心を揺らすようにはできなかったのは、やはり「夢十夜」の「太陽に追いつけない船」、「音楽だけで愛を交わしている男女」に象徴されていると私は考える。そして直が一郎に求めていた「心的なる交感・交情」が二郎と叶いながら、後に述べることになるのだが、二郎の性質をはじめとした多くの障害があったためそれ以上進めず、一郎に愛を求める不安定な夫婦生活を続けなければならなかったわけが、直がもつとも悲劇だと感じたことではなかったのだろうか。

既に一郎夫婦がうまくいっていないということは長野家では周知の事実であったが、和歌山での二人旅では直は二郎にその苦悩を訴えているかのような場面が多く見られウ子よとに目を向けていきたい。電車内で黙っている二郎に対しては批判的な言葉を浴びせておきながら、「あなた兄さんにそんな事を云ったことがありますか」（同二十八）と尋ねられると急に機嫌を悪くする直の態度は「一郎との心的なる交感・交情は「その位な事」と済まされるほど記憶に少ないこと」（十）が読みとれ、一郎と離れて二人つきりになっている今話題にするのはふさわしくないことだと抗議をしているかのように見える。更に直は「これでも出来るだけの事は兄さんに為て上げて積よ」（兄三十一）と自分が妻としての義務を果たしていることを語っているが、それはあくまで「積」であって、「家に縛られているから仕方なくムリしているのよ」という苦しい気持ちが裏に隠されていてそれを二郎と二人つきりになった時、涙ながらに訴えていると言える。よってこの場面は大きな注目点ではないかと私は考えている。これは直が「長野家においての立場」よりも「女」としての自分を重視していることをあらわしてしまっただけの場面と見られるからである。まだこの段階では直は「一郎の妻」として生きることが正しい道であることを認識しているのは、二郎が直に向けた一郎に対する依頼や質問への



彼女自身の答えなどからも分かる。しかしこれらのやりとりをしていた時、二階からの「三味線の音が聞こえなかったのは、一郎を問題にしていたとしても、二人は二人だけの世界にいたから」(注十二)というように、二人の心的なる交感・交情を深めることになり、直はもちろん、二郎でさえ道德の道からはみ出していったと考えられる。ここから直は苦悩からの最大の解決方法を無意識に考えるようになり、二郎を誘惑するという道德に反する行為に走ったのだと考えられる。それは「二郎との心中をしてもいいと直が言ったことは(心的なる交感・交情から「死を招く肉体的なる交感・交情」もかまわないという全面的解放に通じ、心的なる交感・交情の分裂矛盾を止揚し、意識下に上らせたといえる)(注十二)というように本当の愛を貫くならば「長野家での死」も厭わないという半端でない覚悟をもつての事だったと考えられる。だが二郎は東から昇り西へと沈むという法則を決して破らない太陽の如く、道德の持ち主だったため結局「長野家の秩序」を守り、「死を回避した」のだと私は考える。だがここで不思議に思われるのが、何故正しい道を進んだ二郎が、和歌山での直との関わりをこれ程までしっかりと語っているのかということである。あまりに鮮烈だったからということも十分に考えられるが、やはり「未来の悲劇」と関係があったことが大きな要因だと私は考える。「外の場合なら彼女の手を取って共に泣いて遣りやかった」(兄三十二)などは、直に味方する気持ちはありながら、「道德を守るためにはどうすることも出来なかった」という反省がうかがえるのである。

特別な空間を離れた後は直の二郎への特別な働きかけはなくなったようであるが、そんな中で「女景清」の逸話を聞く場面を今度は直に視点を向けて、この時の一郎夫婦の心情の差異とそれを見ていた二郎が現在何を思っているかについて述べていきたい。前章で述べた通り一郎はここで失明と愛について真剣に考えていたのだが、一方の直は唇に少し冷笑を浮かべたのである。それはまるで「盲目の女性の言い分はもつともだけけれど、自分たち夫婦は気持ちを通じ合わないのだから、失明してもどうだか」と考えたように見えるのである。つまり一郎が真の夫婦について考えていたのに対し、直はここでもまた自分が夫を愛そうとしているのかという疑念を強めてしまったのだと考えられる。二郎は「その対照を比較して、突然彼等の間から蟻まっている妙な関係に気が付いた。その蟻まりの中に、自分も引きずり込まれているという、一種厭うべき空気の匂いも容赦なく自分の鼻を衝いた」(帰ってから十八)と語っているが、この大きな差異こそが一郎の失明後の反動となつて、夫婦が幸福な暗闇に生きることに繋がってしまったことが後に分かったからだと考えられる。その差異に気づきながら、関わるのを嫌がったことは二人の悲劇に対して二郎が大きな反省をしているのではないかと私は見ている。特に直はこの「特異な話」を聞き、更に一郎が「女の方は関係付くとか慕う様になる」(同・十九)という発言を受けて、ここでそれを「妙な御話ね」(同)と返しているが、「二郎の妻」である自分はそのようではないという拒絶反応がうかがえる。つまり「長野家」における立場から抜け出したい気持ちがいっつもであり一郎と向き合っているも、和歌山の夜と同じようなサインを無意識に出していたと言え、当然それは二郎に向けてのものでもあったと言える。しかしやはりここでも前述したとおり、二郎は何も出来なかったのである。

その後「長野家」のために二郎は家を離れ下宿するわけだが、その直前、直は結婚以来初めてと言える程の愛嬌を一郎に見せ、二郎には珍しく冷淡な挨拶をし、これは「一人で出ていく二郎への敵がい心から」(注十三)と論じられている。つまり二郎に逃げられてしまい淋しく悔しいという気持ちをはっきり自覚されたということであろうが、それと同時に「やはり私は長野家で心から愛し合うことが極めて困難な夫婦生活を送らなければならない」という悲しい覚悟を決めてみせた態度だったのだろうと推測できる。

そうして事態が落ち着いたかに見えた頃、和歌山の夜の再現をするかのように、ある夜直が二郎の下宿を訪れて二人つきりで話すという場面は非常に注目し値すると言える。しかも和歌山の場合は暴風雨という事故のせいで作られた空間であったが、今回は直自らが意図的に訪ねてきたという明らかな違いがあり、やはりここでも直の言動から考えさせられることが多いのである。直は一郎に対する苦悩を二郎に吐きかけていく中で、自分のことを「立枯になるまで凝っているより外に仕方がない」、二郎のことを「人間だから何時どんな病気に罹らないとも限らないから」と語っているが、私はこのセリフから、この時点で一郎がセックスレスに陥り、肉体関係を結べないことがはっきりしたため、「私はこのままで長野家で夫と暮らしているだけの女として一生を終えてしまおうしかない」という悲痛な思いが込

められていると考えた。しかも顔を近づけてこのような訴えをするということは、和歌山の夜に二郎を誘惑したのとは違い、よりしっかりと心的な交感・交情を結びたいという切迫した気持ちがかがえる。それはおそらく「直の心からの告白は『私を奪って下さい、私を奪い去ってくれる人は、貴方以外いません。そうでなければ私は死んでも同然です』という意味」(注十四)であろう。

この夜の出来事は二郎の道德観を数日間揺さぶることになるのだが、限界直前の中で訴えた直にとつてはすぐに返事が欲しかったため帰り際の『其蓋を締める音』とは自分を夫の傍から奪い去ってほしいという直の二郎への働きかけの終了の象徴的な音であった(注十五)というように完全に二郎の愛を諦めてしまったのだと私は考える。更にこれと同様に「夢十夜・第七夜」においても前半では頻繁に書かれていた「太陽を追いかける船」といった表現は、夜になってしまった終結部ではなくなってしまう、「朝日を待つ」、「朝日に向かつて」などではなく、ただ「船は例の通り黒い煙を吐いて、通り過ぎてしまった」と書かれている。法則と道德を同一に考えている私としては最後に「太陽を追わなくなった船」はやはりこの時のある意味自暴自棄な直と重なるのではと考える。このように直の一連の行動を見ていくと、一郎にとつて直は「自分を翻弄する女だった」ということが正しかったと言えるであろう。

そしてここで直が二郎への愛を求めることをやめても、既に揺さぶられていた心は収まることはなく、最後には自らの目を潰す結果となったことは論じてきた通りである。ここから一方の二郎に視点を向けたのだが先程も少し述べたように、彼は直の言動を考え、そのことを長々と克明に語っているのだが、その時話題になつた一郎夫婦の問題を心配しているだけには、私にはとても考えられず、何かの必要性があつたのではと考えるようになった。「自分の頭は絶えず嫂の幽霊に追い廻された」(塵労六)という述懐は、それ自身が「二郎が直を愛していることがはっきりあらわれたことではないかと私は考える。しかしこの表現からも分かるように、あくまで一郎とセツトで考えていて、道德から離れられないため「この崇りを払い退ける手段」(同)を探そうとするなど、自覚しようとしなかったのではないだろうか。「二郎は通俗的なモラルの持ち主で、直との恋は無理な話だった。もしくは漱石が性格の造形に多少の曖昧さを残しながら、モラルの方に軍配を上げた」(注十六)という説は大体納得がいくが、私の場合は「本当は愛していたのに、道德に無意識に抑え込まれてしまい、直の愛に応えられなかった男」だと私は考える。たとえば、確かに直が二郎に対して自らはたらきかけることはやめてしまっているが、直が風邪気味であった(同二十一)と聞いたときは彼女への愛に応える最後のチャンスだったと言えるのである。この時は、一郎がHさんとの旅行を承諾した頃なので、直が一郎に打たれた頃と推測され、体調不良の原因も直の精神のバランスが崩れたためと説明されればもっとも納得がいくと言える。そんな時、一度はあきらめた二郎が「男として」優しい態度をとってくれたならば彼女にとつてこれ程の喜びはなかつたであろうし、今度こそ正直に一郎に対する本当の不満、二郎への愛や助けてほしいなどという心の奥からの切望を訴えることになつたかもしれないのである。しかし当の二郎の方は一郎がHさんと旅行することでこれから事態が全て解決していくだろうという浅はかな考えを無意識に抱いたせいで、直の体調のことを気にかけて、実家に様子を見に行くことにあえて比重を置かない心理がはたらいたように私は考える。やはりここでも「夢十夜・第七夜」を重ねると、既に「太陽を追いかけるのをやめた船」には何があつても「道德の象徴である太陽を拝むことにはできないようになってるんだな」と感じてしまう。つまり直と二郎はお互いに心から愛し合っており、道德という観念を捨てていけば「自然な愛」による幸福を直に与えられていたわけである。しかし実際はそれが出来ず、一郎の失明により作られた不自然な「幸福な暗闇」の中で直は生きることとなり、その未来の悲劇について二郎はここで回避できなかったことをもっとも後悔しているのではないかと私は考えるのである。

#### 四 暗闇が生んだもう一つの暗闇

だが二郎の反省は本当にキレイなものであるとみなしていいのだろうか。この章では二郎の述懐を更に奥深く検証していったうえで、そこにはまだ多くのことが隠

されているのではないかという思いを抱くことになったので、それについて述べていきたい。二郎の数々の不手際が重なったせいで夫婦の悲劇につながったことは述べてきたとおりである。特に直の愛に応えられなかったことに対しては、二郎は「正しい道徳を持った男であったから仕方がなかった」と多少なりとも彼を擁護する論になっていたと思う。しかし二郎は「自然な愛を与えていれば、直の悲劇は救うことが出来た」のだということははっきりと分かっており、「直への愛は確かに抱いていたので彼女が幸福を共にする相手としては一郎よりも二郎の方がふさわしかった」ということが事実となるわけである。そんな二郎が「一郎夫婦が幸福な暗闇の中で生きていく姿」を見つめる中で男として「何故……」という感情を抱かないのだろうかと私は考えるようになった。それは道徳の持ち主である二郎だからこそ、押さえ込んでしまっているのだろうか、二郎自身が「愛を手に入れることが出来なかったことに苦悩している」から述懐してしまっただけか考えられない二つの挿話が書かれているからである。

まず第一に挙げられるのが、一郎が二郎に「パオロとフランチェスカの恋」について自らの見解を述べる場面（帰ってから二十七・二十八）である。ここで一郎がパオロは二郎、フランチェスカは直、パオロの兄は自分として語っているのは明らかである。そして「パオロとフランチェスカは自然な恋愛を貫こうとした反道徳的な二人だったので当時は咎められたが、神聖な愛だったからこそ語り継がれた。しかし兄の道義は瞬時に忘れ去られた」といった考えのもとで「だから道徳に加勢するものは永久の勝利者だ……」と自らの敗北の悲壮感や直と二郎が勝利することへの非難を込めて語るのである。だが一郎はこの時二郎に家を出ることを告げられており、一郎自身が抱いていた「直と二郎が自然な愛を貫き、自分が敗北者になる」という彼の恐怖心は、二郎のおかげで払拭されるというのに、二郎を責めるように話したことになる。それに対しては二郎は嫌な思いをしたことも事実であるが、自分が「道徳を守るために家を出る」ことを一郎は理解できず、一郎の精神に尋常ではない一種の状態が起ったのではと懸念を抱いたことを強調しているようである。しかしそれならば物語と照らし合わせて説得力をつけようとしていた一郎の行為は、彼のその暴走を示すものであればいいので、二郎がきつちりと述懐する必要など特にないと考えられるのである。よって私は、二郎は一郎の行為そのものよりも、話自体に対して述べておきたかたのではないかと考えるようになった。なぜなら二郎こそ悲惨な結末を避け道徳を守ろうとした男なのに、奇抜な手をつかい暗闇の中で生きることにならなければ道徳を守れなかった一郎が、永久の勝利を得たことになるからである。もちろんこの話を一郎がした時点では、目を潰すなどという具体的な考えは生まれていなかったであろうが、反道徳を何としても押さえ込もうとしている態度がうかがえ、ようやく勝者となったことに対しての批判が無意識に二郎に語らせているのではと私は、考える。これ程まではっきりと兄が話した内容を述べるのは「こんなことになるのなら、反道徳的な恋をしてもよかった、それを貫いて一郎に殺されてもよかった」と実際のところは「死」まで考えを広げていたのではないかと私は疑いたくなくなってしまっているのである。次に挙げられるのが、「三沢が精神異常の娘さんを彼女が亡くなったのちも愛し続ける話」である。三沢が彼女を愛しく思うようになったのが「自分の孤独を訴えるように袖に縫られるように感じた」（友達・三十三）という出来事がきっかけだったという話は、この時点では友達のための思い出話に過ぎない。しかしこの恋の展開は、驚くほど、二郎が今後直に抱いていくであろう感情を語るうえで不可欠なものだと考えられる。娘さんの行為は病気のせいからか本当に三沢を愛しているからかはっきりしないため、三沢は自らがそれが愛だと決めつけたことで満足するわけであるが、二郎の場合はこれまで見てきた直の孤独なる訴えに対しては道徳がまかり通る世界にいたため愛の意識を避けざるを得なかったもので、三沢がうらやましかったという気持ちが必要ならばわざわざこの話を持ち出してくる必要性はないと言えるのである。

ただこの逸話に対しては一郎は「その女の三沢に云った言葉は純粋なものじゃなからうか」（兄・十二）と語らせるものになっている。それは直が世間の責任という中で生きていたので娘さんのように心を正直な形であらわさないことを非難するためのセリフとみなせるので、二郎の三沢への羨望は、皮肉にもこの時はほとんど納得できなかった一郎の思想から行き着いたものだった感は否めない。

しかし更に進んでいく三沢と娘さんの関わりに対しては二郎はまだ述懐をつづけていつている。それは「三沢がその女の死んだとき、冷たい頬へ接吻した」（兄・九）

や「三沢は厭きず何時まで例の精神病の娘さんの話をした」（帰ってから・三十三）という出来事である。娘さんの死によって三沢までが完全に道徳から離れ、「肉体的なる交感・交情」に極めて近い接吻という行動に出たこと、何も気にすることなく彼女への愛しさを語って心が満たされていることは「死」こそが愛を完全に純粋なものとし、三沢の心の中で永久にそれを抱きつづける幸福をもたらしたと強調されていると言える。一方、二郎と直は道徳を持った人間であり、直は誘惑はしても精神病患者ではないので、二郎は作中で三沢のような愛を一切自覚することが出来なかったのである。三沢と娘さんの愛の深まりの過程は「死」までも介した異常なものであったとしても、一郎夫婦のそれはまた違う異常な方法で愛を手にして生きる姿を見つめている未来の二郎にとっては鮮烈ではありうらやましいという感情が込もっていたのではないかと考える。しかし三沢は娘さんのことを心に焼き付けて愛し続けるにしても、身体は離れているため、別の女性と結婚するという少し現実的な面がこの恋愛でも見えてしまうところがある。この事実に向面した時、既に直から心中を持ちかけられていた二郎は「永遠の愛を確実にもたらず死」について無意識に考えを巡らした可能性があるのではないだろうか。述べてきた通り、二郎は心中はもちろん、直と愛を交わすことなどあつてはならないという意識をしっかりと持って生きてきたわけだが、三沢にしてもせいぜい死体に接吻をしたという程度の接触しかしていないのである。つまり直と二郎の方が心中して「死の世界」においての「肉体的なる交感・交情」を行える「永遠の愛」に近づいていたということになり、二郎の「三沢の恋」に対する述懐には、結果的にはそれをうらやましいという気持ちになっているのだが、その恋よりも確実な愛を手に来たかも知れない反道徳的な精神を抱けなかった自分への苛立ちなどといったやりきれない感情も心の奥には隠されているのではないかと私は考える。

このように「道徳を犯して兄によって殺される」とか「この世の道徳から逃れるために心中をする」といった考えを「未来」になって無意識に二郎が抱くようになったのではないかと私は考える。そうするとこの感情は、一郎とはまた違う自己中心的なものであると言える。しかもそうなると二郎自身は気づかずにこの述懐を反省・後悔という意識をもって続けていることになりその分余計に悪質であり、二郎もまた違う暗闇に落ち込んだまま生き続けていると言えるのではないだろうか。またこの章では、「夢十夜・第七夜」の世界を置き去りにしてきてしまったが、視点を科学的な面に向けると、太陽は徐々に膨らんでいてるため地球との距離は縮まっているのであり、「太陽もまた船に接近している」ということが出来るのである。しかしそのスピード自体があまりにもゆっくりであるため、太陽は気づいていない、または気づいていても船と対面するほどの力はないと言えないことになり、ここまで論じてきた二郎の心理構造などかなり重なるのではと考えられることも付け加えておきたい。

## 結論

このように私は『行人』の物語世界から未来で起こるであろう出来事を予測してきた。それは二郎にとって一郎に対しても、直に対しても、そして夫婦としての二人に対しても反省しなければならぬ悲劇である。私は『行人』という物語を見つめて、その行き着く先は、主要人物三人全員が暗闇に落ち込んでしまう異常な世界であるという風に論じてきた。だがここで強調しておきたいのは誰も死んでいないということである。これは『行人』の行人は恐らく『烈子』の『天瑞篇』における婦人に対する行人の意味（注十七）と対応するといえる。しかし悲劇の上で成り立った幸福の中で生き続ける一郎夫婦とそれをあらゆる感情を抱いて見つめ続ける二郎からは「限りなく死に近い生」を感じられると言えないだろうか。『行人』という題は物語の後、「更に悲劇が起こりながらも、そのまま死の淵で生き続ける人間を皮肉にもあらわしたものであろう」として、私の『行人』論を終えたいと思う。

- 注一 平岡敏夫 「夢十夜」・詩情豊かな想像の世界  
 注二 江藤淳 「漱石とその時代 第五部」  
 注三 本多顕彰 「行人」解説  
 注四 大野淳一 〃  
 注五 山田晃 「行人」異議  
 注六 森田喜郎 夏目漱石論・「運命」の展開(和泉書院 一九五九年三月十四日)  
 注七、八、九、十、十二、十三、十四、十五 盛忍 「決定版『行人』論」  
 注十一 伊豆利彦 「行人」論の前提(『日本文学』一九六九年三月号)  
 注十六 久保田芳太郎 「行人」・男と女について  
 注十七 小宮豊隆 「漱石の芸術」

テキスト・参考文献リスト

内田道雄・久保田芳太郎 「作品論 夏目漱石」(双文社出版 一九七六年九月三十日)：久保田芳太郎「行人」・男と女について